

人との関わり

安来市立第三中学校 三年 山崎美柑

「こんにちは」

自分は幼いころから吃音症です。みなさんは、吃音症と聞いてどんな病気か、イメージできますか。

吃音症とは、自分の意に反して、繰り返し最初の言葉を言ってしまったり、最初の言葉を引き延ばしてから文を言ったり、最初の言葉が出てこずに詰まったりする症状のことをいいます。吃音症はあまり広く理解されていないところがありますが、二〇〇五年に発達障害の支援の対象にもなっていて、医療機関の診断書があれば、障害者手帳も取得することができます。

自分は、最初に言った言葉を繰り返してしまう症状が出たり、声を発することができず、詰まってしまう症状が出たりすることがあります。

そんな自分の吃音症に関わる経験の中に、深く記憶に残っている思い出が三つあります。

一つ目は、小学校の頃に授業で、自分が前に出て発表するとき、なかなか話し出せない自分のために友達が「いっせーの一で」と言ってくれたことです。いつも言ってくれて、自分でも言い出すタイミングがつかみやすかったので、とても嬉しかったことを覚えています。しかし、その友達は、先生に「今は友達が言う時間だから、いっせーの一で、と言うのはやめましょう。」と怒られてしまいました。当然ですが、その日からその友達は「いっせーの一で」とは言ってくれなくなったし、自分のせいで怒られてしまったので、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

二つ目は、小学校の運動会の時でした。自分は実行委員を任されていて、開会式でみんなの前で話さなければなりません。頭では話す内容が分かっているのに、みんなや保護者、先生方を前にして、とても緊張してしまったので、話し始めることができずに固まってしまいました。一〇分もあれば十分に言い終えることのできる挨拶なのに、言い出すまでに二〇分くらいかかってようやく話し始めることができました。きっとみんな、やっと話せたか…と思っていたと思います。自分はやらかしてしまった…という恥ずかしい気持ちと、誰かからこのことについて、何か言われるんじゃないかという不安な気持ちでいました。ところが実際には何か言われるようなことはなく、今考えてみると、みんな気を使って、そっとしておいてくれたのではないかと思います。

三つ目は、いまでも家族や、周りの人がしてくれている事です。自分が言葉を詰まらせたときや、くりかえし最初の言葉を言っているときに、みんなは「ゆっくりでいいよ」と言ってくれたり、黙って待っていてくれたりすることです。兄は、自分が言葉に詰まって言い出せないことをごまかすように笑っていると、一緒に笑って待っていてくれます。私がやっと言葉を言い終わった後は、「話すまでが長い」と笑いながら怒らずに伝えてくれます。自分の周りは本当に優しい人ばかりだと感謝の気持ちでいっぱいです。ネットで見たことがあ

るのですが、「吃音症のせいで、いじめにあったことがあるか」というアンケートに対し、六〇%以上の方が「はい」と答えています。そのわりに自分は吃音のことでいじめに遭ったことは一度もありません。このことから、自分は人との関わりという面で、とても恵まれているんだなと強く思います。

最後に、皆さんにお願いしたいことがあります。もし、吃音症の方が周りにいた時には、その人が言葉を発するまで、ゆっくりと待ってあげてほしいということです。また、吃音症である、またはかもしれない人には、人と話すことを嫌とは思わずに、勇気をもって積極的に話してほしいと思うのです。自分はこの病気で、申し訳ないと思ったことがたくさんありました。一方で人のやさしさに触れることができ嬉しかったこともたくさんありました。そしてその優しさに支えられてこれまで大きな苦労や苦しみ、悲しみを感じることなくやってこれたように思います。だから自分は、吃音症であるということに臆することなく、これからも積極的に人と関わって生きていこうと思います。